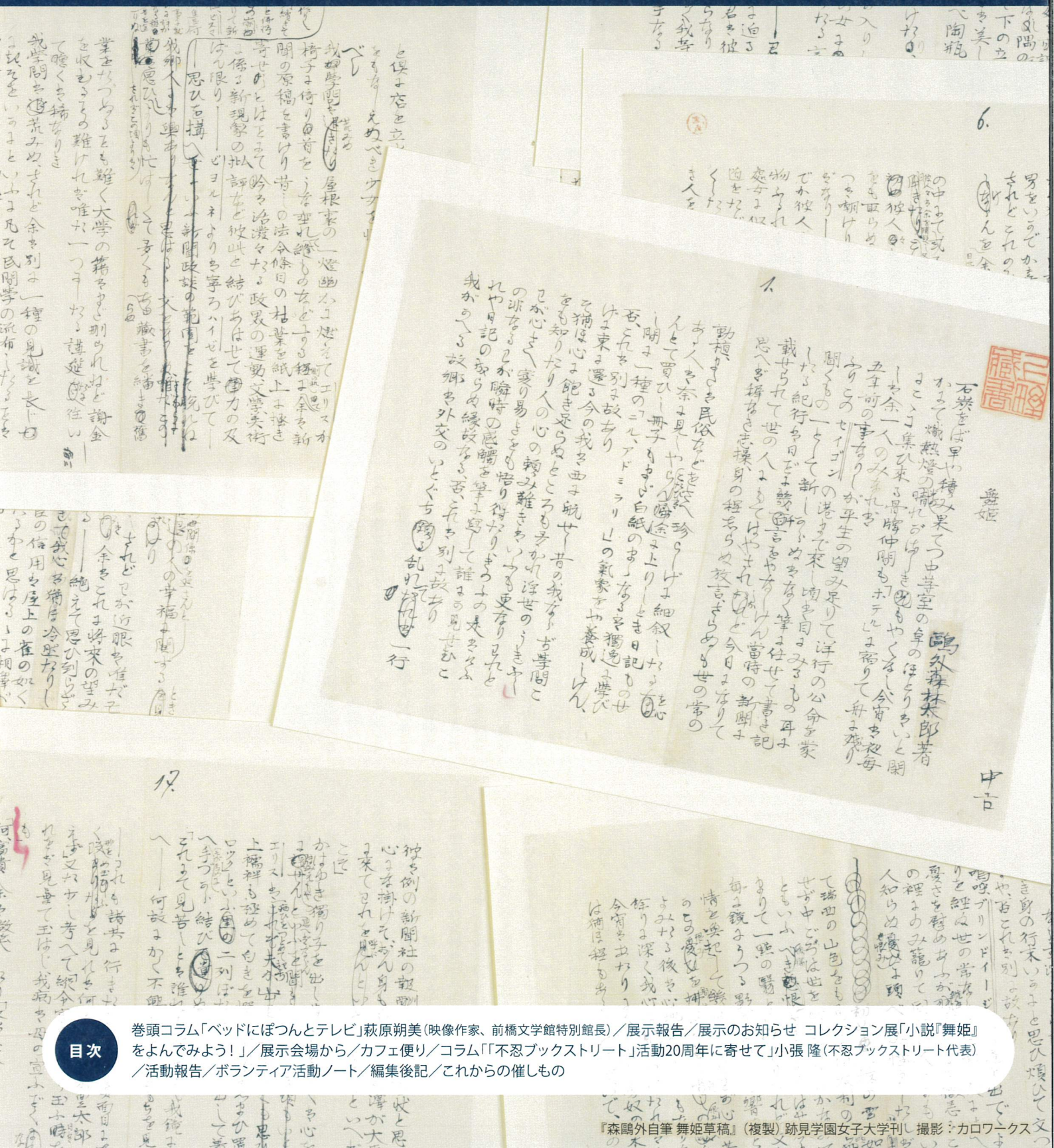
2025年6月 文京区立森鷗外記念館編集・発行（年4回発行）

文京区立 森鷗外記念館NEWS No.51



目次

巻頭コラム「ベッドにぽつんとテレビ」萩原朔美（映像作家、前橋文学館特別館長）／展示報告／展示のお知らせ コレクション展「小説『舞姫』をよんでみよう！」／展示会場から／カフェ便り／コラム「「不忍ブックストリート」活動20周年に寄せて」小張 隆（不忍ブックストリート代表）／活動報告／ボランティア活動ノート／編集後記／これからの催しもの

『森鷗外自筆 舞姫草稿』（複製）跡見学園女子大学刊 撮影：カロワークス

巻頭コラム

ベッドにぽつんとテレビ

萩原朔美（映像作家、前橋文学館特別館長）

森茉莉さんの思い出をたぐっていくと、スクリーンに映し出されるシーンは、みんな頬が緩んでしまう事ばかりだ。

子供の頃、我が家にやってくる茉莉さんは、お喋り好きな近所のおばさんだった。何をしている人か、私には分からなかった。いきなり現れて、自分が出会った人、面白かった映画の事を愉快そうに話して帰って行く。あの人は素敵とか意地悪そうだとか、女学生のように一人で喋り一人で笑う。自由で愉快で趣味人の雰囲気を振りまく人だった。子供には近寄る事の出来ない不思議な大人だったのだ。

それが、どんなきっかけだか忘れたけれど、読んだ本の感想の会話に私が加わってから、急に距離が縮まって、愉快な人から親戚のおばさんぐらいに親しくなった。

ある日、母親に頼まれて、何か荷物を届けに茉莉さんの下北沢のアパートへ行った事があった。薄暗い廊下。扉の横にうず高く放置された新聞紙や雑誌の類い。薄暗い部屋の中の乱雑な状況。私はその時、親戚のおばさんよりも身近な親近感を覚えた。というのは、当時中学生だった私は部屋を整理整頓する能力に欠けていて、混乱の空間に同じ匂いを感じ取ったからである。他人の視線を拒絶する意志。自分の心地よさを一番大事にする姿勢。それが私には心地よく、シンパシーを感じたのである。

高校生の時、母親が子宮筋腫の手術をした事があった。茉莉さんと私は廊下で待機していた。手術が終わると、医者が切除した部位を見せながら、無事に終わった事を説明してくれた。私は、その切除された子宮を、貰いたいと申し出ると勿論断られた。自分がかつてそこに居た場所なので、アルコール漬けにして部屋に飾ったら面白いと、若気の至りで妙な事を思いついたのだ。そんな馬鹿な提案をしたヤンチャな私を、茉莉さんは愉快そうに笑っていた。笑ってやり過ごす事が出来るのは、おそらく茉莉さんぐらいのものだろう。ますます、距離が縮まったのは言うまでもない。

私が雑誌の編集を始めた時、茉莉さんにインタビューして紙面を埋めようと考えた事があった。当時住んでいたマンションに、カメラマンと訪ねた。すると、部屋に入るのは、私だけしか駄目と言う。仕方なくカメラマンには帰ってもらった。やはり整頓されているとは言い難い部屋だった。テーブルの上に出版社からの現金書留が開封されたまま放り出されてあったり、洗ってない食器が放置されている。変わっていないなあと嬉しくなった。窓際のベッドの端には本が乱雑に積み重ねてあり、もう一方の端にはテレビがぽつんと転がっていた。本に寄りかかって、一日中テレビを鑑賞し、その感想を日記として週刊誌に書くのだと言う。

「じゃ、寝る時はどうするの？」

と聞くと、そのまま本を背もたれにして寝ると言う。身体が真っ直ぐにならなかったら、疲れるのではないかと心配したけれど、別に何の問題もないらしい。寝るスタイルも自由気ままなのだ。

その時、私は生真面目な母親と、気ままな茉莉さんが付き合っていけるのは、まったく正反対の性格だからではないかと、納得したのであった。近さに安堵するのではなく、遠さを楽しむ交友だ。

性質もそうだけれど、身体の管理も全く相反していた。

私の母親は、なにより健康第一で、食事制限を続けていた。動きの激しいダンスが出来る体型を維持する事が何より重要だった。身体を動かすようになってから、心身の状態がいい方に動き出したらしい。そこで出会った人にすぐダンスの稽古を勧める。茉莉さんにも盛んに稽古に参加するように誘っていた。勿論茉莉さんがダンスなどやるはずもない。自分の好きなものを、好きなだけ食べる。制限を設ける事など考えた事もないだろう。

しかし、運動をやろうが、まったく動かないで過ごそうが、食事に気をつけていようが、好きな物だけを食べ続けようが、生きる長さには何の影響もありはしない。それを考えると、やはり自然に頬が弛んでくるのだ。何故なら、茉莉さんは84歳、母親も84歳の生涯だったからだ。

この二人の人生を見続け、その年齢に近づきつつある私としては、一体自分はどちらに傾くのだろうかと、ふと考える事がある。まあ、どちらのライフスタイルに近づいたとしても、長さは変わりないのだから、気が楽である。

最近、ベッドに潜り込む度に、足元にテレビの存在を感じ、頬が弛んでくる。生きることの苦しみは変わらない。ただ笑い飛ばす事は出来る。凡俗に縛られず過ごしなさい。そう幻のテレビがつぶやきながら、笑っているのである。

萩原朔美　はぎわら・さくみ

映像作家、エッセイスト。多摩美術大学名誉教授。母は萩原葉子、母方の祖父は萩原朔太郎。昭和42年、寺山修司主宰の演劇実験室・天井桟敷の立ち上げに参加、俳優・演出家として活躍。同50年、月刊誌「ビックリハウス」を創刊し、初代編集長を務める。著書に『毎日が冒険』（三月書房、平成14年）、『死んだら何を書いてもいいわ』（新潮社、平成20年）、『劇的な人生こそ真実』（新潮社、平成22年）他多数。令和3年、世田谷美術館に版画、写真、オブジェなど、ほぼ全ての作品が収蔵された。平成28年、前橋文学館館長に就任。令和6年より現職。

萩原朔太郎記念・水と詩のまち 前橋文学館

群馬県前橋市千代田町三丁目12-10　TEL：027-235-8011

開館時間●9:00～17:00（最終入館は16:30まで）
休 館 日●毎週水曜日（祝日の場合は開館し、翌日休館）、年末年始ほか
入 館 料●朔太郎展示室：一般・大学生100円、高校生以下無料
特別企画展開催時は別料金

展示報告

特別展「本を捧ぐ――鷗外と献呈本」

2025年4月12日(土)～6月29日(日)

当館ではこれまで、書簡を中心に鷗外の人物交流を紹介する展覧会を幾度か開催してきましたが、本展では献呈本を軸に据え、企画しました。展示は「鷗外に贈られた本」と「鷗外が贈った本」の二章立てで構成し、展示室いっぱいに献呈本が並びました。

第一章では、鷗外の生涯と緩やかに重ね合わせながら「鷗外に贈られた本」を紹介しました。いわゆる献呈署名本（贈り主による献辞と署名が記されたもの）や本の冒頭に鷗外への献辞が印刷されているもの、鷗外自ら献呈本であることを書き込んでいる本などを展覧しました。その内容は贈り主の著書や鷗外が関心を持っている分野の本など様々。贈り主も文学、医学を中心に、美術、演劇、哲学、民俗学など多岐に渡るジャンルの人々です。バリエーション豊かな献呈本とあわせて、ところどころに鷗外と贈り主の関係が垣間見える資料を展示することで、献呈本に込められた贈り主の想いが浮かび上がってきました。

本章の展示資料の多くは、東京大学総合図書館の鷗外旧蔵書コレクション「鷗外文庫」からの出品です。生前、鷗外が最も大切にしていたという蔵書の数々が、100年以上の時を経て再び観潮楼に並ぶ機会となりました。

第二章「鷗外が贈った本」では、家族にプレゼントした本の他、『鷗外日記』や鷗外宛礼状をたよりに、自著の献呈を紹介しました。鷗外にたくさんの本が贈られていたように、鷗外もまた、身近な人や信頼のおける文学者に本を贈っていたことが分かりました。鷗外が贈った本のその後を辿ることは困難ですが、本展では鷗外が妹・喜美子にプレゼントした『湖月抄』（公益財団法人日本近代文学館蔵）、鷗外による献呈署名本の夏目漱石旧蔵『涓滴（けんてき）』、小島政二郎旧蔵『仮名遣意見（かなづかいいけん）』（いずれも個人蔵）など、貴重な「鷗外が贈った本」の実物を展示することが叶いました。

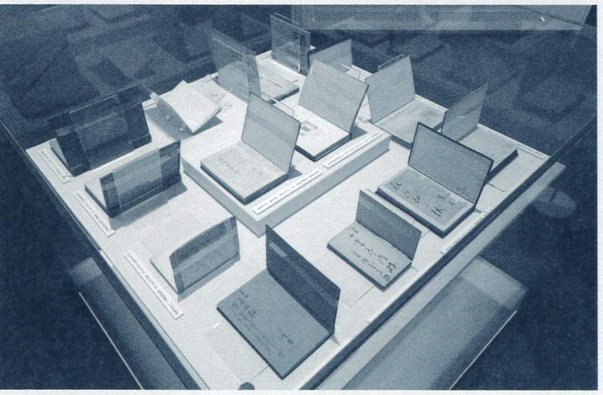
本を通じた人物交流は、鷗外以外の文学者にも見ることができます。鷗外と同時代の明治・大正期の文学者による献呈署名本20冊を特別展示しました（いずれも個人蔵）。鷗外に贈られた本にも含まれている石川啄木『一握の砂』（尾崎行雄宛）、北原白秋訳『まざあ・ぐうす』（河井酔茗宛）の他、現存する献呈署名本自体が希少な尾崎紅葉『三人妻』（小栗風葉宛）、若山牧水『独り歌へる』（前田夕暮宛）など、貴重な献呈署名本の数々が整然と並ぶ様子に多くの注目が集まりました。

来館者からは「たくさんの献呈本が並んでいて圧巻だった」「様々な人物の直筆文字が見られて興味深い」「昔の本は装丁も美しい」などの感想をいただきました。タブレットなどで読書をすることも多くなった現代において、鷗外たちが手にした献呈本一冊一冊の佇まいを楽しんでいただけたのなら嬉しく思います。

最後になりましたが、本展を開催するにあたり、ご出品ならびにご協力を賜りました関係者の皆さまに、厚く御礼申しあげます。

第一章「鷗外に贈られた本」

第二章「鷗外が贈った本」



特別展示「献呈署名本の世界～鷗外と同時代の作家たち～」

撮影：カロワークス

【展覧会図録販売中】
出品資料のカラー図版、解説の他、本展に登場する人物の相関図、論考、コラム、関連年譜等を収録。
A4判　60頁　税込880円

左記のとおり、展示関連講演会を開催しました。

○「献呈署名本の世界」
講師：川島幸希氏
（秀明大学名誉学長、近代文学署名本コレクター）
日時：5月17日（土）14時～15時30分

○「鷗外献呈本に見る大逆事件」
講師：坂井修一氏
（東京大学副学長・附属図書館館長、歌人）
日時：5月31日（土）14時～15時30分

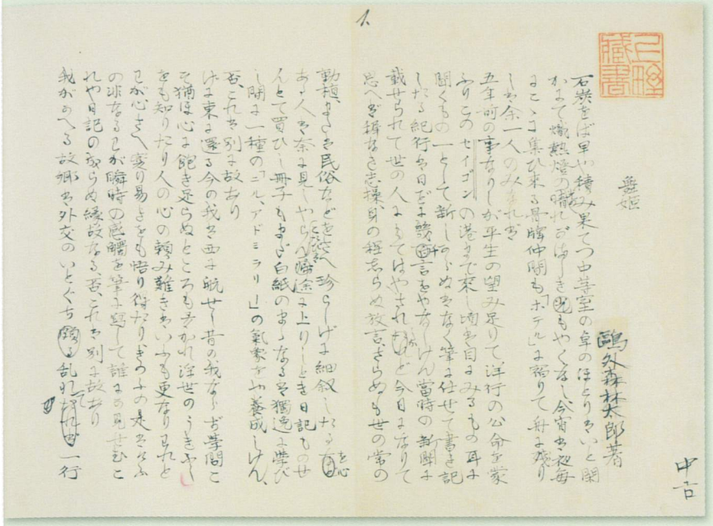
展示のお知らせ

コレクション展

「小説『舞姫』をよんでみよう！」

森鷗外（文久2―大正11）は、小説『舞姫』を明治23年1月に雑誌「国民之友」に発表しました。それまで論文や外国文学の翻訳等を主に執筆してきた鷗外が発表した創作小説の第一作目です。この作品は、昭和32年以降、高等学校国語科の教科書に取り上げられてきたことから、森鷗外という作家を『舞姫』という作品とともに記憶している人も多いことでしょう。

小説『舞姫』は、ドイツから船で帰国途中の青年・太田豊太郎による回想という形をとります。官僚として派遣されたベルリンで出会ったエリスとの恋、自分の学問や将来などを巡る葛藤や悩みとともに、帰国に至ったいきさつが描かれます。


『森鷗外自筆 舞姫草稿』（複製）
跡見学園女子大学刊
撮影：カロワークス

本展では、鷗外生前に『舞姫』が掲載された雑誌や書籍のほか、創作の背景にあった鷗外自身のドイツ留学や当時の反響などに関連する館蔵資料を展示します。

そして、「国民之友」で発表される直前の明治22年末に執筆した自筆草稿（複製）全28枚を展示します。鷗外は『舞姫』を書籍に収録するたびに推敲を重ねており、今日私たちが教科書などでよむ『舞姫』と自筆草稿とを比べると、語句の変更や削除箇所があることに気づきます。手書きの文字や推敲の跡に注目しながらよみ、鷗外が吟味を重ねた言葉を味わってください。

会期● 2025年7月4日（金）―9月30日（火）
［会期中の休館日］7月22日（火）・23日（水）、8月25日（月）・26（火）、9月24日（水）・25日（木）
会場● 文京区立森鷗外記念館 展示室2
開館時間● 10時～18時（最終入館は17時30分）
※7月9日（水）は9時開館
※8月2日（土）は20時閉館（最終入館19時30分）
観覧料● 一般300円（20名以上の団体：240円）
※中学生以下無料、障害者手帳ご提示の方と介護者1名まで無料
※文京ふるさと歴史館入館券、パンフレット（押印入）、友の会会員証ご提示で2割引き
※その他各種割引がございます。詳細は記念館HPをご覧ください。

『塵泥』千章館
大正4（1915）年12月
『舞姫』収録。

『美奈和集』春陽堂
明治25（1892）年7月
鷗外の第一作品集。『舞姫』収録。

「国民之友」69号 民友社
明治23（1890）年1月
『舞姫』収録（初出）。

関連講演会のお知らせ

展覧会期間中に当館2階講座室にて関連講演会を予定しております。申込方法は8頁をご覧ください。

「明治20年代の青年太田豊太郎 ―作品『舞姫』が問いかけてくるもの―」

明治20年代を生きる一青年太田豊太郎が、〈今・ここ〉に生きる私たちに投げかける問いかけを見つめ直してみたいと思います。

講師 須田喜代次氏（大妻女子大学名誉教授、森鷗外記念会会長）
日時 8月30日（土） 14時～15時30分
定員 50名（事前申込制）
料金 無料（参加票と本展観覧券（半券可）が必要）
申込締切 8月14日（木）必着

ギャラリートーク

展示室にて当館学芸員が展示解説を行います。申込不要、当日の展示観覧券が必要です。

日時 7月30日（水）、9月3日（水）
14時～（30分程度）

学芸員による子ども向けギャラリートーク

ワークシートを手に、当館学芸員と共に鷗外の生涯（常設展示）をめぐります。申込不要、当日の展示観覧券が必要です。（中学生以下無料）

日時 8月3日（日） 13時～（30分程度）
対象 小学校4年生から

鷗外忌記念展示

7月9日の鷗外命日（鷗外忌）にちなみ、鷗外「遺言書」の原資料を展示します。鷗外忌当日は9時から開館し、展示を観覧された方にオリジナルしおりをプレゼントします。

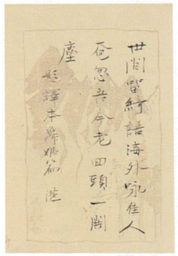
「遺言書」展示期間
7月4日（金）～31日（木）の開館日

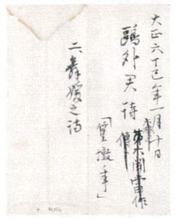
展示会場から

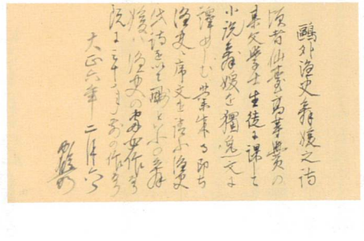
鷗外自筆「題訳本舞姫」詩稿

【200016】

鷗外の友人賀古鶴所（かこつるど）が所蔵していた「題訳本舞姫」詩稿［図版上］、詩稿が入っていたと思われる封筒［図版中］、詩の由来を記した添え書き［図版下］の3点を仕立てた書幅です。封筒に「大正六丁巳年一月十日 鷗外君詩」とあり、賀古が詩稿を受け取った日と思われます（丁巳は大正6年を示す）。「題訳本舞姫」は、明治23年1月に『舞姫』を発表してから27年が経ち、55歳となった鷗外による端的な作品解説と当時を振り返った感慨を詠じた漢詩です。賀古は添え書きに、「仙台高等黌の某文学士」にドイツ語訳『舞姫』への序文を請われた鷗外が、この漢詩を与えたと記しています。





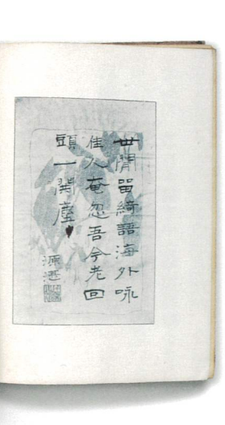


「某文学士」とは、仙台の旧制第二高等学校でドイツ語教授をしていた小池堅治（明治11年～昭和44年、号・秋草）のことです。小池は、大正6年5月に南江堂書店より『独訳 舞姫 倫敦塔』を出版しました。同書は、小池によるドイツ語訳（『舞姫』と夏目漱石の小説『倫敦塔』）と原文を併記し、巻末に注釈を付しています。「題訳本舞姫」は、『舞姫』のドイツ語訳『Die Tänzerin』の前に、写真版（参考図版参照）で掲載されました。

小池は面識のなかった鷗外に訳文を示して出版の旨を知らせ、鷗外は大正5年9月27日に許諾の書簡を書いています。ドイツ語訳『舞姫』は、小池の同僚 Georg（ゲオルク） Würtel（ヴュルテル）教授（ドイツ語、ラテン語）との推敲を経て完成しました。その後、鷗外は小池に序文を請われ、「題訳本舞姫」を作り、小池に贈ったのでしょう。

『独訳 舞姫 倫敦塔』掲載の写真版「題訳本舞姫」には、詩の題はなく、署名「源湛（鷗外の諱）」の後に印「千朶山房主人」が捺されています。賀古が所蔵していた詩稿と写真版を比べると、模様は異なりますが似た用箋に書かれており、賀古所蔵の詩稿は小池に贈るものを書き上げる過程で書かれた草稿の可能性もあります。

本資料は、コレクション展「小説『舞姫』をよんでみよう！」に出品します。

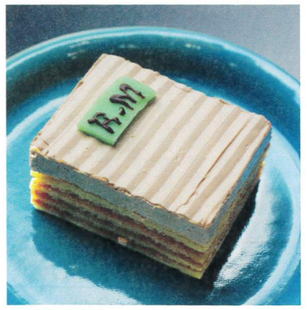


参考図版
森鷗外、夏目漱石作、小池秋草訳『独文 舞姫 倫敦塔』
南江堂書店 大正8年再版

〈主な参考文献〉
小池堅治『ローヤル・タイプライタアのすさび』（小池秋草『随筆 雲板』書物展望社 昭和13年）、高橋陽一『森鷗外の漢詩解釈ノート（九）』（『鷗外』104号 平成31年1月）、長谷川泉『鷗外文学十六 「舞姫」独訳に関する鷗外書簡』（長谷川泉『鷗外文学の側溝』明治書院 昭和56年）、「「西辰存稿」手記」（登録番号200092）

カフェ便り

たくさんの本が主役となった特別展「本を捧ぐ――鷗外と献呈本」期間中、モリキネカフェでは展覧会をイメージした限定デザートを販売しました。生地とラズベリージャムを交互に重ね層にして本の側面に見立てた、その名も「本のケーキ」です。本のタイトルには鷗外の本名・森林太郎のイニシャル「R.M」をあしらいました。こちらは6月29日までお召し上がりいただけます。次回コレクション展「小説『舞姫』をよんでみよう！」開幕の7月4日からは、恒例のソーダフロートが始まります。どうぞお楽しみに。


モリキネデザート
ドリンク付き　税込1,200円～

また、4月6日からモリキネビールの通常販売が始まりました。モリキネビールは2019年度コレクション展「文学とビール――鷗外と味わう麦酒の話」にあわせて初登場したのち、イベントで何度か限定販売をしていましたが、このたび年間を通してお楽しみいただけるようになりました。しっかりとした苦みに加え、津和野産シークワーサーなど柑橘の爽やかさも持ち合わせた深い味わいをご賞味ください。

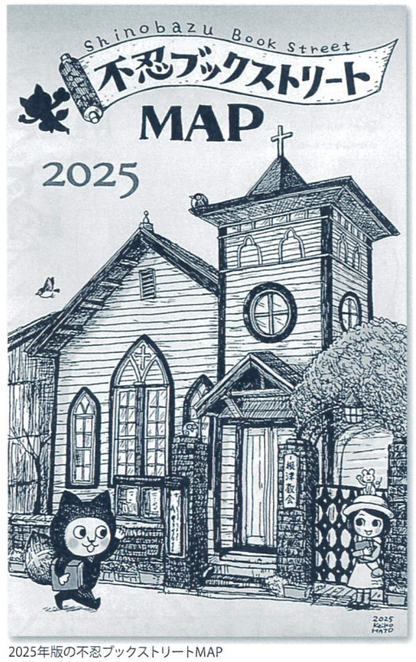
※8月27日（水）～29日（金）は、メンテナンスのため休業します。

コラム

「不忍ブックストリート」活動20周年に寄せて

小張 隆（不忍ブックストリート代表）

東京の東側、文京区と台東区にまたがる、谷中、根津、千駄木（通称「谷根千」）の中心を、「不忍通り」が走っています。森鷗外を始め、夏目漱石や高村光太郎など、日本文学を代表する名だたる文人たちが集い、暮らし、執筆をしていたこの界隈には、個性的な新刊書店、古書店、ブックカフェや図書館が点在し、本好きな方々には「本の街」として認知されています。また喫茶店や雑貨店、ギャラリーなど散歩の途中に立ち寄りたいお店もたくさんあります。そこで私たちは、２００５年から街の「本と散歩」に関わるスポットを入れたイラストマップを製作し、「不忍ブックストリートＭＡＰ」と名づけて無料配布してきました。この地図を手にして、たくさんの本好き、散歩好きの方にこの街を訪れてほしい、そして、この街の魅力を感じてほしいと思います。また、地元の方にも広く使っていただきたいと考えています。新しい発見、意外な出会いが、きっと、この中にあるはずです。



2025年版の不忍ブックストリートMAP

ＭＡＰの制作にあわせて「一箱古本市」と呼ばれるイベントも20年前から開催しています。地域の様々なお店や施設（開催場所を「大家さん」と呼びます）の軒先や室内をお借りし、そこで「店主さん」が段ボール箱ひとつ分の古本を販売します。どんな本をいくらで売るかは店主の自由で、限られたスペース・冊数だからこそ、そこには店主の頭の中にある「宇宙」が表現される面白さがあります。オリジナルの屋号を付けたり、売り方・見せ方を工夫したりと、一日だけの「本屋さんごっこ」が楽しめます。そのイベントを支える役目の一つに「助っ人さん」があります。事前の準備や当日の運営に力を貸していただくボランティアスタッフのことで、「助っ人さん」の存在無くして、このイベントは成り立ちません。今や全国各地で開催されている「一箱古本市」は、この場所から広がっていきました。様々な土地に出店する店主はもちろん、助っ人同士の交流も多くあり、その中から実際に本屋を始めたり、本のある場所を立ち上げたりといった動きも見られます。本を媒介にした様々な繋がり、そして豊かな循環が生まれ続けています。

活動20周年の記念となる今年の「一箱古本市」は、去る5月5日（月祝）に開催いたしました。コロナ禍で中止や規模縮小を余儀なくされたこの数年間でしたが、今回は文京区立森鷗外記念館を始めとして、古本やめねふね堂、往来堂書店、根津教会、**kitchen haco**、忠綱寺、**HOTEL GRAPHY NEZU**の7会場で開催し、スタンプラリーのスポット（文学通信、古書ほうろう、タナカホンヤ、ひるねこBOOKS）を含めると全11箇所と、以前の規模まで戻すことができました。当日は快晴に恵まれ、全国から多くの本好きの方々が集まり、思い思いに本を手に取ったり、店主の話に耳を傾けたりしていました。年齢や職業、趣味趣向など関係なく「本が好き」という思いで集まった人々が、本を間に挟み笑顔で会話している様子は、とても素晴らしいものです。参加者それぞれが、ここにしかない本や人との出会いを楽しんだのではないでしょうか。

谷根千には、街からひろがる多様な活動をしているＮＰＯや団体があります。『地域雑誌 谷中・根津・千駄木』（２００９年終刊）を発行しながら、地域の暮らしや文化についての活動に取り組んできた「谷根千工房」を始め、谷根千〈記憶の蔵〉を拠点に映画フィルムを保存する活動を行なっている「映画保存協会」、旧安田楠雄邸の日常管理と公開を行なっている「たてもの応援団」、市田邸の保全やカヤバ珈琲の運営を手がけている「たいとう歴史都市研究会」などです。また、毎年秋には「まちじゅうが展覧会場」を合言葉に「芸工展」が開催され、様々なお店やこの街で暮らす人々がそれぞれに展示やワークショップを企画しています。東日本大震災後には、被災地に本を届ける「一箱本送り隊」もこの地で結成されました。谷中にある最小文化複合施設「**HAGISO**」をお借りし、２０１５年に不忍ブックストリートの10周年展を開催したこともあります。千駄木の養源寺では２０１６年から２０１８年まで、秋に「しのばずくんの本の縁日」という本のイベントを、不忍ブックストリートが主催して行いました。

不忍ブックストリートは、この地域の団体や住民、お店や施設と関わりながら、これまでの20年間を歩んでまいりました。活動開始当初からは変化したものも多くあり、これからも街は移り変わってゆくでしょう。それでもこの谷根千の街と寄り添いながら、変わらず本に関する活動を続けていきたいと思います。

今年の一箱古本市のようす　文京区立森鷗外記念館にて　撮影：上石写真

活動報告

食イベント「文人と食～森鷗外～」に協力しました

3月15日、文京区観光協会主催「文人と食～森鷗外～」に当館も協力という形で参加しました。鷗外の好物や森家の食卓に並んだ料理の再現に挑戦し、味わってみようという企画です。鷗外の家族や知人たちによる森家の食卓の記述から、根津にお店を構える「ねづくりや」の皆さんがイメージを膨らませアレンジした献立を作ってくださりました。その名も「鷗外定食」。特に力をいれたメインディッシュには、令和5年度当館特別展「鷗外の食」図録より、拓殖大学の村上祐紀教授翻訳による当時のドイツのレシピを参考に、森家のおもてなし"レクラム料理"からキャベツの肉詰めを。そのほか母特製卵焼き入りおにぎり、里芋の唐揚げ、筍の煮物、ナスの揚げ浸し、デザート（？）の饅頭茶漬けと彩り豊かなお皿が並びました。参加された皆様は「鑑賞する・散策する・食べる」をテーマに、当館での展示ガイドツアーで観潮楼での鷗外と家族の暮らしや作品に触れ、千駄木から根津の街を巡るスタンプラリーで散策した後に「ねづくりや」に集合、森家の味に想いを馳せ料理を楽しむひとときを過ごしました。

今年も「一箱古本市」に参加しました

5月5日、昨年に引き続き、当館を会場の一つとして不忍ブックストリート主催「一箱古本市」が開催されました。今年は、不忍ブックストリートが活動を始めてから20年の節目に当たります。会場（大家さん）も7箇所に増え、マップやスタンプラリーの台紙を手に、どのように会場を巡るか作戦を立てている参加者の姿も多く見られました。現在では各地で開催されている「一箱古本市」ですが、その発祥地としてあくまで「一箱」にこだわり、出店者（店主さん）も単純に販売のみではなく、一箱や古本をとおして参加者の皆様との会話を楽しんでいました。実行委員や当日ボランティアスタッフ（助っ人さん）のサポートもあり、街中が本好きであふれる賑やかな一日でした。特別展「本を捧ぐ――鷗外と献呈本」でも触れたように、時代が変わっても〈本〉を通じた交流が生まれていることが感じられるゴールデンウィークとなりました。

ボランティア活動ノート

館外で研修中のボランティアメンバー

令和7年度に入り、第5期展示ガイドボランティアの募集をいたしました。前回の第4期募集は令和元年、その直後にコロナ禍で募集が停止していたため、今回は6年ぶりの募集となります。早速、幅広い年齢層の皆様から問い合わせや応募がありました。応募者は、今後「鷗外講座 基礎編」の受講をした後、森鷗外の生涯や作品についてはもちろん、当館の成り立ちや千駄木の町について学びます。秋頃より先輩の展示ガイドボランティアメンバーと一緒に実際に展示ガイドへ参加、具体的な活動状況やアドバイスなどを参考に、秋から冬にかけ、展示ガイドとしてデビューの予定です。

ボランティアによる館内ガイドは土日祝日の午後2時より実施しております。オレンジ色のベストが目印です。ご来館の際はぜひご参加ください。

館内ガイド中のようす

編集後記

四季の中でも夏季が長すぎると感じられる昨今、夏日の気温をマークしても4、5月は比較的快適な気候の日が多くありました。毎年4月に根津神社で開催されている文京つつじまつりも相変わらずの人気ぶりで、つつじの鑑賞や街歩きなどを目的に、グループで行動している方々を多く見かけました。当館では20名以上の団体見学の場合、展示観覧料を2割引きでご案内しております。団体見学申込書をお渡ししますので、当館宛てに事前にお問い合わせください。館内案内をご希望の方は、ご来館予定日の2週間前までにお申込みください。また、学校でのご利用も随時受け付けています。

＊　＊　＊

5月2日から8月2日まで、「谷根千小さなお店巡りスタンプラリー」が開催されています。対象店舗で500円以上買い物をするとスタンプを押印、15店舗以上を巡ってスタンプを集めると景品がもらえるというもので、当館もスポットとなっています。当館では観覧券をご購入の方が対象です。素敵なお店ばかりですので、当館にお越しの際は是非巡ってみてください。

これからの催しもの

催しは◎以外は全て事前申込制です。各申込締切日必着でお申込みください。
詳細は、チラシやHPをご覧いただくか、当館までお問い合わせください。
★応募多数の場合抽選とさせていただきます。★悪天候等やむを得ない事情により、日程・講師・内容を変更する場合があります。

7月6日(日)、7日(月) 11:00～17:00

七夕イベント ◎

会場：当館前　料金：無料

期間中、館前に短冊作成コーナーと笹を設置します。

7月9日(水) 9:00(早朝開館)～17:30(最終入館)

鷗外忌記念行事 ◎

鷗外の命日(7月9日)に展覧会を観覧された方に、オリジナルしおりをプレゼントします。

7月20日(日) 11:00～12:30

鷗外講座基礎編 II「鷗外の作品と生涯」

第1回「鷗外が住んだ都市 —ドイツ三部作・小倉三部作に触れながら—」

講師：倉本幸弘氏(森鷗外記念会常任理事)　会場：講座室
定員：50名　料金：500円　申込締切：7月4日(金)必着

8月3日(日) 11:00～12:30

鷗外講座基礎編 II「鷗外の作品と生涯」

第2回「団子坂の日々—森於菟著『父親としての森鷗外』・小堀杏奴著『晩年の父』に触れながら—」

講師：倉本幸弘氏(森鷗外記念会常任理事)　会場：講座室　定員：50名
料金：500円　申込締切：7月18日(金)必着

8月2日(土) 10:00～19:30(最終入館)　※延長開館

文京区民無料観覧日 ◎

文京区在住・在学・在勤の方は無料で展覧会を観覧いただけます。住所が記載されている身分証明書をご提示ください。当日は20:00まで開館時間を延長します。(最終入館19:30)

8月3日(日) 13:00～(30分程度)

「学芸員による子ども向けギャラリートーク」◎

会場：展示室1

小学4年生以上対象。展示室にて当館学芸員と共に鷗外の生涯(常設展示)をめぐります。申込不要、高校生以上の方は当日の展示観覧券が必要です。

8月23日(土) 11:00～17:00

文の京ワークショップ／ふみの日イベント

「ベルリン森鷗外記念館にエアメールを送ろう」◎

会場：エントランス　料金：無料

ドイツ・ベルリンの森鷗外記念館や海外のお友達へハガキを送ってみませんか？　※ハガキを書き終えたら職員に渡してください。当館からお出しします。

8月30日(土) 14:00～15:30

展示関連講演会

「明治20年代の青年太田豊太郎 —作品『舞姫』が問いかけてくるもの—」

講師：須田喜代次氏(大妻女子大学名誉教授、森鷗外記念会会長)
会場：講座室　料金：無料 ※要本展観覧券(半券可)　定員：50名
申込締切：8月14日(木)必着

9月7日(日)、14日(日) 13:30～15:30

新・観潮楼歌会

「朗読体験ワークショップ『舞姫』を朗読する」(全2回)

講師：内木明子氏(朗読家、早稲田大学・相模女子大学非常勤講師)
会場：講座室　定員：16名　料金：3500円(2回分)
申込締切：8月22日(金)消印有効

鷗外の小説『舞姫』を声に出して読む朗読ワークショップです。文語体で書かれた『舞姫』(抜粋)を朗読する全2回の講座です。最終日は個人発表を行います。朗読を始めてみたい方も是非ご応募ください。
※両日参加可能な方のみの募集です。

9月23日(火・祝) 11:00～17:00

文の京ワークショップ／ふみの日イベント

「切手アート」◎

古切手を使って自分だけのしおりやカードを作ります。

会場：エントランス　料金：無料

◇◆上記イベントの申込方法◆◇

事前申込制のイベントは、各申込締切日までに下記のいずれかの方法でお申込みください。申込みは、1通につき1名様(はがき・Eメールどちらかお一人様1通まで)、応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。**申込締切後1週間以内に抽選結果をお知らせします。**

①往復はがき　往信に参加希望プログラム名・日程・氏名(ふりがな)・住所・電話番号、返信用には、住所・氏名を明記の上、〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 文京区立森鷗外記念館イベント係までご応募ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号をご記入ください。

②Eメール　件名に参加希望プログラム名・日程・本文に氏名(ふりがな)・Eメールアドレス・電話番号を明記の上、bmk-event@moriogai-kinenkan.jp までご応募ください。 ※参加可否のご連絡をEメールでいたします。当館からのEメールが受信可能なEメールアドレスをご記入ください。受信制限が設定されている場合、当館からのEメールを受け取れないことがありますので、あらかじめご確認のうえ送信ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号もしくはEメールアドレスをご記入ください。

[ご提供いただきました個人情報は、個人情報保護法に基づき適切に管理し、当該プログラム以外の使用はいたしません。]

文京区立
森鷗外記念館
Mori Ogai Memorial Museum

交通案内

●電車をご利用の場合
- 東京メトロ千代田線「千駄木」駅　1番出口 徒歩5分
- 東京メトロ南北線「本駒込」駅　1番出口 徒歩10分
- 都営三田線「白山」駅　A3番出口 徒歩15分
- JR線・京成線「日暮里」駅　西口 徒歩15分

●バスをご利用の場合
- 都バス 草63番系統「千駄木一丁目」下車 徒歩1分
- 都バス 上58番系統「団子坂下」下車 徒歩5分
- B—ぐる千駄木・駒込ルート「19特養ホーム千駄木の郷」下車 徒歩5分

※一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください

〒113-0022　東京都文京区千駄木1-23-4　TEL: 03-3824-5511
URL: https://moriogai-kinenkan.jp

開館時間　10:00～18:00(最終入館は17:30)
休館日　毎月第4月・火曜日(祝日の場合は開館、例外あり)、年末年始(12月29日～1月3日)、及び展示替期間、燻蒸期間等

印刷物番号 D0125006